

臨床研究に関する情報公開

<人を対象とする医学系研究に関する倫理指針>に基づき、研究の実施について下記のとおり情報を公開します。

研究結果は学会等で発表される事がありますが、その際も個人を特定する情報は公表しません。

★本研究の対象となられる患者さんで本研究にご賛同いただけない方や、研究計画、研究方法、または個人情報の取扱いなどについてお問い合わせがある場合は、下記の<お問い合わせ窓口>までご連絡ください。

★研究不参加を申し出られた場合も、不利益を受けることはありません。

<p><研究課題名> 非小細胞肺癌の薬剤耐性因子に関する研究</p>
<p><研究機関・研究責任者名> 日本大学医学部病態病理学系腫瘍病理学分野（研究責任者）中西 陽子</p>
<p><研究期間> 西暦 2017年 6 月 1 日 ～ 西暦 2020 年 3 月 31 日</p>
<p><研究の目的と意義> 肺癌の治療で、分子標的薬というお薬を使う場合、お薬が効く患者さんと効かない患者さんを検査で調べることができるようになりました。お薬が効く患者さんも治療を続けていく途中でお薬が効きにくくなっていく場合があります。このため、お薬が効きにくくなる原因を調べるための検査を行います。検査は、手術や生検検査や細胞診検査で患者さんから採取されて肺癌と診断された組織を使って行いますので、新たに組織や血液を採取する必要はありません。この研究では、患者さん個々の癌細胞に見られる蛋白質や遺伝子の状態を検査して、お薬の効き方を適切に予測し、個別の治療計画をすみやかにたてられるようになることを目指します。</p>
<p><対象となる患者さん> 西暦 2010 年1月1日～西暦 2016 年 12 月 31 日の期間に肺癌で分子標的治療を施行された方</p>
<p><研究の方法> この研究は、手術や生検検査、細胞診検査で患者さんから採取されて肺癌と診断された組織や細胞を使って行います。患者さん個々の癌組織で EGFR 遺伝子検査や ALK 遺伝子検査が陽性となれば、各々に対応する分子標的治療の効果が期待できます。ただし、患者さんによっては、治療後に効果が低下してくる場合があります。このように治療が効きにくくなる原因を調べるために EGFR 遺伝子の特定の場所に変化が起こっているか、癌細胞の膜の表面に存在する糖蛋白質の状態、癌細胞の増殖を活性化する受容体と呼ばれる蛋白質の状態を調べて評価します。この遺伝子の状態は癌細胞だけに見られ、ある特定のお薬の効果を予測するもので、患者さんの遺伝には全く関係ありませんのでご安心下さい。</p>
<p><お問い合わせ窓口> 日本大学医学部病態病理学系腫瘍病理学分野(東京都板橋区大谷口上町 30-1) 氏名:中西 陽子 電話:03-3972-8111 内線:(医局)2256 (PHS)</p>